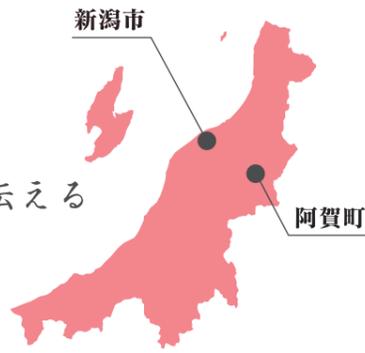


# ふらふら

2023 Eye's  
新潟ここだけ物語

想い | つくる | 伝える



[Fuud]  
2023  
春号  
— 季刊 —

# 阿賀野川の誘い



Take Free  
ご自由にお持ちください

春の暁に染まる福島潟。面積は262ha、阿賀野川がその普形成された新潟砂丘により河道が遮られ、さらに周囲に土砂が堆積してできた湖。五頭連峰を背にした広大な景観と四季折々に豊富な野鳥や水生植物が見られ、「水の国にいがた」を象徴する貴重な自然資産になっている。(新潟市北区)

がんばろう ● ニッポン!



阿賀野川周辺地域へは四季折々に、自然風景を撮影に出かける。特に上流の阿賀町は被写体の宝庫だ。原生林の新緑、紅葉、そして雪景色。大自然の彩りと奥深さに、感動しながらシャッターを切ったことは数知れない。

風景撮影で山奥へ入って行くと、いくつもの限界集落があり、静かに暮らしている老人たちに出会う。交通は不便だし、豪雪地帯でもあり、さらに集落の住人もどんどん減ってゆく中で、老人たちはそこで暮らし続けることを最優先としている。町で暮らす子どもや行政から、離村の勧めを受けることもあるが「やっぱり、ここが一番いい」と離れる気はない。

土井(つちい)という集落の小滝夫妻は、ご主人が亡くなったのを機に、奥さんが子どもに引き取られ山を下りたが、ここへの思いが強く、家族に送ってもらい、頻繁に戻って来ているという。



小荒(こあら)で出会った猪俣夫妻は、この集落最後の住人。「昔、鉱山や発電所建設で栄えた頃はスーパーもあり、祭りもやっていた本当に豊かだったんですよ」と教えてくれた。人はいなくなっても「山の暮らしが一番楽しい」と今も住み続ける。

13年前、室谷という集落では、薪割りをする清野さんという老人に出会った。当時「年を取って体が動かなくなった時の分まで、薪を貯めておく」と言っていたが、2019年に訪ねてみたらその通り、たくさんの薪が家の近くに積んであり、清野さんも93歳で元気だった。

町で暮らす者には計り知れない、山の住人の気高さ、限界集落の老人たちに会う度に、少しずつ分りかけてきた気がする。



写真、文章 / スタジオF(t) 渡部 佳則

- ①土井集落の小滝夫妻は、訪ねるといつもお茶を出してくれた。今は空家になっている。
- ②小荒集落に住む、猪俣夫妻。町に家を建てたが、どうしても山暮らしが捨てられないそうだ。
- ③2010年に薪割りを撮らせてもらった清野さん。10年分くらい作っておきたいと言っていた。

わたべ  
カメラマンの  
取材メモ 9  
阿賀町の限界集落

## 編集後記

「あたりまえ」にあるモノから、普遍的な価値を見出すことは凡人には難しい。つい海外や専門家の客観的な解説に頼ってしまう。今号で紹介した阿賀町の鍾産様は、恥ずかしながらすでに消滅した文化と思っていた。でも人知れず、しっかり受け継がれていた。しかも海外の新しい視点をもって世界で紹介される時代を迎えていた。阿賀野川も高度成長期の真の記憶が、流域にたゆとうてきた地方史への好奇心を遮断してきたように映る。でも車で約1時間半の間、山塊の足元を流れる細い川が、平野を形成し、大小の湖沼を刻み、巨大な川幅をもつ大河になるまでの成長史を見ることが出来る。当然のことながら、それぞれに人と関わりのある流域史がある。それは歴史と地理の教科書のダイジェスト版だった。小誌は今号で初版から60号めにあたるが、新潟県の宝物はまだまだ尽きない。(浅川)

ふうど 2023春号 vol.60

企画編集 ふうど編集室  
発行人 高橋 佑  
取材編集 佐川綾子  
写 真 渡部佳則  
デザイン 斎藤道司  
題 字 小林 翠

## 発行所

株式会社 株式会社 株式会社 株式会社  
株式会社 株式会社 株式会社 株式会社

SUSTAINABLE GOALS 私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800  
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884  
■上越営業所 / 〒943-0805 新潟県上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階2 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800  
■仙台営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目3-47 上杉オオクワビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712  
■名古屋営業所 / 〒464-0025 愛知県名古屋市中千種区桜が丘295番地 第8号オオビル7階 TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081  
■オフィシャルサイト / http://www.takayoshi.co.jp

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNIIGATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学博物館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みなと工房、朱鷺メッセ、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandal、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、りゅうとびあ新潟市民芸術文化会館 <東区>桑名病院、パティスリーカフェオルレアン <西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟荘 <南区>新潟市農業活性化研究センター <北区>新潟せんべい王国、ヒュー福島潟、新潟空港、濁川公民館 <江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館 <西蒲区>カーブドット、ドメス・ショウ <秋葉区>カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館  
【新潟市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新発田市生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田市立図書館、豊浦地区公民館 【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶらん 【村上市】イボヤ会館、村上市観光協会  
【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまこし復興交流館おらたろ 【燕 市】分水ビジターサービスセンター  
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里 【十日町市】十日町市観光協会 【南魚沼市】櫻苑  
【上越市】上越観光コンベンション協会、上越市立水族博物館うみがたり、上越市立高田図書館  
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館  
【東京都】<渋谷区>表参道・新潟館ネオバス <中央区>ブリッジにいがた <千代田区>新潟市東京事務所  
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス  
バインダー

針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライオンキで印刷しています。

# 日本のふとどころへ

思い 気づかない価値

## 日本発見の先駆者

阿賀野川は、国内で十番目に長く、その水量は信濃川に続き全国二位を誇る。

栃木と福島にまたがる荒海山帯を蛇行して流れ、新潟平野をゆつたりカーブしながら横断し日本海に注ぐ。全長二一〇キロメートル。福島県側を阿賀野川と呼び、新潟県に入ると阿賀野川と称を変える。

この極東の島国の片隅に流れる川を、世界にいち早く紹介した英国人女性がいます。その名はイザベラ・ルーシー・バード。世界各地を旅し、数々の旅行記を残した英国地理学会の特別会員の探検家である。

いまから百四十五年前の明治十一年（一八七八）の夏。四十六歳のバードは一人の通訳兼従者の日本人男性をともない、東京から列島を横断し、東北地方を縦断し北海道にいたる三ヶ月におよぶ旅の途中、津川から新潟まで阿賀野川を下る舟上の人になった。福島県で秘境とされる山々の険しい峠をいくつも馬で越えてきただけに、八時間で七十キロメートル移動する舟旅に大満足し、水上から見える景色を愛で、川とともにある村々の慎ましやかな暮らしぶりに心を和ませている。

帰国後、この長旅の体験記を発表するや評判になり、旅行作家としての評価を高めたという。その翻訳本「完訳 日本奥地紀行」(金坂清則訳注)に、阿賀野川の船旅につ

あまりに身近すぎて、忘れていないだろうか。信濃川とともに新潟平野の母なる川、阿賀野川のこと。コロナ禍が少し落ち着いた春、あらためてその底力と流域にひそむ歴史を再発見する旅に出かけてみないか。ガイドは優れた洞察力をもつ明治初頭と令和の外国人、そして「地形は正直」という歴史学者さん。では、ご一緒に。

鋭角的な稜線を描く山に囲まれ、阿賀野川を眼下にする夏渡戸地区。かつては農林漁業と養蚕や炭焼きで自給できた豊かな地区だった。



阿賀川流域と食文化や習俗の共通点が多く、県内でも異質な会津文化圏を形成している。そのひとつに藁製の一度見たら忘れられなくなるアルカイックな形相の鍾馗人形を、地区の守り神として道の端に祀る独特な風習がある。

昔は県境を接する西会津地方でも「人形さま送り」という同種の祭りが盛んだったが、現在はほぼ廃れ、県内では阿賀町の四地区と新発田の一部のみで継承されている。その歴史は四、五百年といわれている。

いて、こう記す。「川は、もつとゆつくりできればうれしいのにと思えるほどに美しかった」。そして『下ってゆく川の流れは幻想的な山々に行く手を遮られる感じになった。舟が通れるだけの幅で岩の門が開いたかと思うと、次に再び山にさえぎられるようになった。』(中略)まるで裸地なきキラリか廃墟なきライン川であり、美しさの点ではいずれにも勝っていた」と阿賀野川上流の風景を絶賛している。見慣れた風景が、にわか

## 会津の文化圏

バードが二日間滞在した津川は、阿賀野川と常浪川が合流する

## 令和のイザベラさんたち

それら四つの地区のなかで男女の鍾馗様を祀る珍しい地区があると知り、さっそく取材を申し入れた。夏渡戸という、津川から上流へ車で二十分ほどの、世帯数六戸ほどの小さな地区である。祭りは秘匿性の高い神事だから、取材は難しいかもしれないと町役所の担当者から聞いていたが、区長の江花一実さんの計らいで、祭りの一部始終に立ち会えることになった。

三月十一日の朝、切り立った段丘の上に集落をおく夏渡戸に着く。朝霧に包まれ、にわかには全容を理解できなかったが、幅の広い道路が山と川に挟まれた地形に伸びやかさを与えていた。山林資源に恵まれているこの地区は、林業や炭焼き、養蚕のほか、昭和三年に阿賀野川を堰き止める鹿瀬ダム発電所ができるまで、眼下の川で鮭鱒や鮎など川魚を獲り、水運を利用して木材を出荷するなど自然の恵みだけで自給できた地区だったと、後で江花さんから教わる。



イザベラ・ルーシー・バードの肖像(野内隆裕：所蔵)と津川の旧大船渡から見た阿賀野川。

地点にある阿賀町の中心地。江戸時代は会津藩の藩米の積み出し港として、磐越西線が開通する大正期まで山と海をつなぐ物流の結節点として賑わった町である。そして阿賀町には驚きの歴史があった。もともと越後国の一地域だったのに、明治十九年(一八八六)まで、会津の領域に置かれていたのである。それも、なんと七百年もの長い間なのだ。なぜ会津の支配地になったのか。

その始まりは平安後期、平家が滅びる壇ノ浦の合戦より二十年ほど前までさかのぼる。阿賀野川以北で勢力をふるった有力豪族の越後城氏が、会津を支配していた恵日寺の僧兵の首領と和平関係を結ぶために、自分の叔母を嫁がせ、同時に城氏が支配していた越後国の小川荘を寄進した。以来、そのまま会津のもとに置かれたのである。この小川荘の地域が、現在の阿賀町のほぼ全域と重なる。

こうした会津との深い歴史を裏付けるように、阿賀町は上流の

レス・ハッジスさんだった。二人とも東京在住のベネズエラ人。陽気な中米の人が、なぜ怖ろしい鍾馗様に注目したのか。八幡さんの友人で阿賀まちづくり株式会社の堀口一彦さんは「二人は仕事柄、日本の伝統文化をまっさらな眼で見、表現できる力があります。三年前、八幡さんを鍾馗様が祀られているお堂に案内したところ強く惹かれ、この伝統を世界に発信したいと思ったようです。それで私が町と折衝し、今年ようやく予算がつき、今日ここに来ることができました。鍾馗様に籠められている土着の精神性が、本物を知る二人の心を刺したのです」と説明してくれる。期せずして令和のイザベラさんとの出会い、嬉しくなる。

午前八時五十分、鍾馗様づくりのメンバーと取材陣が揃って御神酒を献杯し、見えない何かに見守られる二日間が始まった。それが神なのか、先祖たちの魂なのか判然としなかったが、『奇祭』という好奇心を煽る形容が軽薄に感じるほど、地区の人びとが鍾馗様に寄せる思いの厚さに心を打たれた。



日本に帰化した青空テレビの代表、八幡一生さん(上)と米大学日本校テンブル大学の特任准教授のアキレス・ハッジスさん。

# 藁人形が神になった日

魂の可視化

## へにらみ〜が命

鍾馗しょうきは中国の民間伝承に由来する神。疫病退散や魔除けの神だから、より猛々しい貌がらの方がいい、と夏渡戸なつわたの年配者はいう。地区の両端で見張りに立つため、睨みの視線が外に向いてさえいけば、細かいことなど気にしないそうだ。

カサツカサツ、大量の稲わらから一本ずつ枯葉や退色した茎を取り除く作業から鍾馗様づくりが始まる。七人が思い思いにわらをすぐる軽快な音の重なりは心地よく、魂が原郷に回帰するような優しい響きだった。そして時折スペイン語と会津訛りの方言がアクセントになり、山里の小さな集落の一面を愉快な音空間へと変貌させていく。

鍾馗様の材料は、大量の稲わらと体の骨格になる天然木と縄。作り方の手順を伝える書き物はなく、地区の男衆が総出で行う作業を通し、伝統のカタチと造形の技

けると勇ましい形相の鍾馗様が完成した。そして集落の産土神である月山神社から祭神を招喜会館に設えられた祭壇に移し、宮司による渾身の入魂式が執り行われた。無機物だった藁人形が神格を備え、霊力を身につけた瞬間だった。

ひととおりの祭祀が終わるや、二人の女性が鍾馗様の前で不思議なことをした。わらを丸めた玉を鍾馗様の体のあちこちに埋め始めたのだ。どんな意味なのか。「健康に心配のある方が、心配のある場所と同じ所に『願いわら』を埋め、鍾馗様に病の元凶を移し健康回復を願うのです」と江花区長が話す。

こうして住民の祈りと疾患を引き受けてくれた鍾馗様が御立ちの

が伝承されてきた。頭と体を作る人、手を作る人、編笠などのパーツを作る人などに分かれ、それぞれが黙々と手を動かす。時々「これ、どうすんだべ」。一年に一回のことだから忘れてしまった」と手を止め考え込む人もいた。今年もベテラン二人が欠け、後を託された人たちだけで取り組

む初めての年だそう。それでも一日で、男女の鍾馗様の本体が造形され、最後にわらの切り口を美しく揃える化粧鋏はさみを入れられた。どちらも身長は百三十センチ、体重は約三十キログラム。性差の表現は、生命の再生を象徴するシンボルの有る無しのみ。実に大雑把なのだ。でも皆が自らの美意識

指や頭などが稲わらと縄を駆使し次々に器用に造形されていく。昔は作り手は男性に限られていたが、現在は人手が足りず女性も参加する。

と葛藤するように人を寄せつけないオーラを放ち、一貫して敬虔な気が作業場を包んでいた。その様子から、住民以外の立ち入りを禁止する意味を知る。鍾馗様を手作りする行為を通じ、神と人が交感していたのだ。

それにしても、なぜ女の鍾馗様がいるのか。「ここは昔からジェンダーレスで、今風の多様性を認める自由な気風があったと思います」と江花区長が説明する。そして稲わらについて「今は稲刈りも機械化され、なかなか稲わらが手に入らないので、町内の麒麟山酒造が育てた酒米を天日乾燥したものを頂いてきました。ですから、このわらは極上の清酒になる原料を育て、次に鍾馗様の材料になり、残ったわらくずは畑の肥料にもなる循環型の優れモノなんです。昔の日本人は稲わらで生活の必要なものをあたりまえに作る知恵と技術がありました。でも今はその技が全国から消え、伝統行事のなかだけに残る希少なものになってしまいました」。

## 守ってくんねえよ

翌朝から、鍾馗様の最後の仕上げが始まる。ひと筆ひと筆、江花区長さんが息を詰めて、白布に魂の痕跡を移す。その布を顔に巻きつ

時を迎えた。若者の背に担がれた令和五年の守り神は、山の清新な息吹きをまとい、神威をあまねく解き放ちながら巡幸した後、お堂に祀られた。これから一年の間、来る日も来る日もひっそりと目の前を通過する悪霊や疫病に睨みをきかせるのだ。その道すがら目を潤ませ「ああ、いい出来だ。今年も守ってくんねえよ」と長い間、頭を垂れていた古老の姿が強く印象に残った。

この祭りは、六戸ほどの家が人手と資金を出し合うほか、参拝者の寄付やお賽銭を重要な資金源にして開催されている。でもこれから先、住民だけで未来へ継承するには、課題が多いことも現実である。



鍾馗様の担ぎ手は、今年から世代交代し10代と20代の若者が担った。



3月12日、鍾馗様の入魂式を終え、御立ち前にひと息つく地区の人たち。前列左から安藤照容さん、宮司の大江公典さん、江花ゆか子さんとお孫さん。二列目の江花君子さん、江花研一さん、江花敏男さん、区長の江花一実さんと長男の一成さん。三列目が鈴木謙介さん、江花健さん、江花正文さんと孫の大地さん。

# すばいぞ阿賀野川

伝える 大河の記憶

## 新潟市は辺境の地？

夏渡戸地区の傍らを流れていた阿賀野川は、八十キロメートルほどで白波のたつ日本海で泡沫と成って尽きる。河口付近の川幅は約一キロメートル。その庄巻の広がり果然とする。しかし、ここが本流になったのは三百年ほど前のこと。それまでの河道を西側に追いやっていた砂丘列の一部を崩して作った排水用の堀割が、あろうことか完成から半年足らずで決壊。人工の堀が現在の本流になってしまったのである。

そんな膨大な自然のエネルギーを政令市新潟の市街地で見せつける阿賀野川は、どんなドラマを秘めているのか。新潟市歴史博物館の館長で、全国各地の地形から地域の歴史を探ってきた考古学の専門家である坂井秀弥さんに、阿賀野川が新潟にもたらした文化的な影響などの話を伺った。二〇〇九年まで十六年の間、文化庁の仕事

で全国を見てきた経験に基づく広い視点と、新潟市のなかでも阿賀野川と密接な関係にある沼垂の出身者としての感慨をにじませる話は興味深く、あっという間に予定の取材時間が過ぎていた。

「全国のいろんなところを見てもきたが、日本列島のなかで一本の川があることで、文化的に大きな違いがでるのは新潟県だけです」といきなり川の重要性を説く。そして「阿賀野川は、新潟県を南北に分ける境い目です。八世紀はじめまで川が越後と越中の国境で、対岸から北には淳足柵が設置され、文化の異なる蝦夷の地と位置づけられていました。ええ、古代の新潟市は国境の町？ 人里離れた寒村？」「そう、新潟は大和政権にすれば北辺に位置し、異文化と接点になるところです。考古学的にも北陸系と東北系の特色をもつ土器がおなじ遺跡から出土する特異な地域です」。

そんな一本の川が、文化圏の変化に影響するの。それは気象の面から合理的な説明ができます。日本海の沿岸地域

## 沼垂町と阿賀野川

大正期に合併し、新潟市の近代化の基礎を作ったと言われている沼垂町について教えてください。「沼垂は、まさに阿賀野川に翻弄された町です。古代に国境の川だった頃、川の右岸に昔の沼垂があり、そこに淳足柵がおかれ北海道まで遠征する大きな船が入りしていましたが、ところが江戸時代、阿賀野川と信濃川が合流すると砂の堆積で地形が変わり、港町としての存在が危ぶまれ、なんと半世紀の間に四回も町が移転し、先人たちは

大変な苦勞を強いられました」。でも沼垂の逆境の時は、それで終わらなかった。「安住の地にも阿賀野川と信濃川の河口は同じでしたから、信濃川左岸に港がある新潟と、お互いに港を使う権利を主張し幕府を巻き込む港訴訟を何回もおこし、ことごとく沼垂が負けています。沼垂は新発田藩の港、片や新潟は後に幕府領になるまで長岡藩の港でした。なにしろ新潟町はもともと歴史的に信濃川に港があったことから、権利を主張するだけの合理性がありまして、訴訟では常に軍配が上がりました。沼

の年間平均気温を比較すると、新潟から松江まで約七キロメートルの間で気温が一度下がるのに対し、新潟から酒田までわずか一五〇キロメートルの間で気温が一度も低下しません。つまり新潟から急激に気温が低下し、北へ行くほど低下の度合いが速くなります。当然ながら、気温差は作物に影響します。稲作を中心とする文化圏は阿賀野川で足止めされ、北方と大きな文化の差が生じました。もっとも昔は、いまより遙かに川幅が広く、流れも急でしたから両岸で交流できる環境でなかったことも一因です。なるほど大河は文化の分水嶺だった。

## ルーツの違い？

現在も文化圏の違いは、あるのか。「阿賀野川以北の地域は、いまも東北的な訛りがありますね。今の若い人は違いますが、三十年ほど前、聖籠町のお年寄りの話を聞いた時、話の内容が理解できず困った経験があります。市内でも沼垂や松浜の年配の方が話す言葉は、少々荒っぽく、やっぱりルーツが違うのかなと思います。中世、阿賀野川以北の地域に盤踞した揚北衆は、鎌倉時代以来の領主たちで、独立意識がよかった。上杉景勝に

垂の出身者としては、苦勞した先人たちをほんとうに尊敬します」と坂井さんの声に熱がこもる。

ところで坂井さんは「高低差」に敏感だ。町や畑を歩きながら足の裏に高低差を感じるとワクワクするという。多くの発掘調査の経験から、周囲より高くなっている場所には、必ず遺跡があるとの直感が働くそうだ。「地形は正直」が持論。故郷に戻り、若い頃に気づかなかった地形に潜む歴史を探りたいと意欲的だ。とくに江戸時代以前の町のルーツを探りたいと目を輝かせた。そして河口にこれだけの大きな都市が

最後まで対抗するのは新発田重家です。いまでも上杉氏に対する信度は、上越に比べ下越は相対的に低いように思います。そうした異なるルーツと地形や気候の違いから、県内の農産物の多様性が生まれ新潟の大きな魅力になっていると坂井さんは、いう。

400年前の新潟の重要な手がかりになる古地図を背にする坂井秀弥さん。地図の中央部、阿賀野川と信濃川が河口の手前で合流し、海側に大きな砂丘が連なっていることがわかる。



阿賀野川の乱流蛇行を記憶する福島湯。



かつての河道だった十二湯。



河口に堆積した砂で分断された川の一部に、湧き水が溜まって誕生した、ひょうたん池。



日本海にもっとも近い地点にかかる松浜橋。



阿賀野川右岸にある松浜漁港。

※すべての写真は新潟市北区



## インフォメーション

### みなとびあ 新潟市歴史博物館

〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
TEL 025-225-6111

## 読者の声 ～前号を読んで～

### 歴史などを参考に

前々号の大河津分水路の歴史などを参考にしています。退職するまでは燕市・弥彦村の歴史等の資料集めに奔走し、大変苦勞した経験があります。「ふうど」も短期間で情報を入手し、編集されていると思います。今後の活躍を祈っています。

(燕市 70代男性)

### 新潟は不思議な県!

県外のものにとって、米どころ新潟は誰でも知っている。でも「日本梨」の生産でも国内8位と健闘しているとは知りませんでした。巻末で紹介された河川数の果樹園の雄大な景色から、生産順位はともかく「ニイガタの梨」をもっとPRしても良いのでは。「ふうど」で新潟の実力を知ること心情的に新潟を応援したくなります。

(佐倉市 80代男性)